

# 論文の内容の要旨

論文題目 芥川龍之介小説のジャンル研究—小説形式と歴史の関係について

氏名 李 碩

本研究では、ジャンル論を使って芥川龍之介（1892—1927）の小説形式の歴史性を考察する。芥川が社会問題に対して積極的に意見を示したことは少ない。当時、プロレタリア文学は、既存の文学観や社会観を批判して大きな反響を呼んでいたが、芥川はその動きからも距離を置いていた。こうした芥川の小説から、彼の政治的な主張を読み取ることは容易なことではない。しかし、芥川の小説の構造を分析すれば、当時の社会と無関係ではないことが分かる。というのも、時代変動と共に、芥川の小説にも変化が生じるが、それは小説の内容よりは形式の方で起きるからである。とくに、その変化は後期の小説作品に著しくあらわれるので、本研究では、「河童」（『改造』、1927）と「齒車」（『文芸春秋』、1927）を中心にその形式の変化を論じる。ちなみに、本研究のいう形式とは、文体や語りではなく、小説の構造を意味する。これから本研究が明らかにしようとするのは、芥川小説の構造と時代変化の関係である。

研究方法として本研究は、構造主義とマルクス主義のジャンル論を同時に参照しながら、芥川小説の歴史性を見極める。概して言えば、本研究は小説ジャンルの原型を定めるよりは、ジャンルが如何に変化するかを論述するので、構造主義よりはマルクス主義に近い立場を取る。しかし、ジャンル同士の関係を問うことが有効的であるという構造主義の主張にも賛同する。同一の小説ジャンルだけを論じれば、時代変化の一面しか見えないとも考えているからである。それゆえ、本研究は第3章で「河童」を、第5章で

「歯車」を論じる。本研究が「河童」と「歯車」を取り上げる理由は、二つの作品が相反する内容を示しているからである。「河童」がロマンスに隣接し、ユートピアを描いて集団や共同体に言及する反面、「歯車」は自然主義と深い関係にあり、日常生活を観察して個人の心理や情動を表現する。「河童」が主人公の疎外やアイロニーの手法を通して現実世界を逆照射するとすれば、「歯車」は主人公に寄り添ってその内面を写しだしている。したがって、二つの作品は異なる歴史性を示しており、その意味について考察した。

そして、構造主義とマルクス主義を弁証法的に統一したフレドリック・ジェイムソンの研究方法も参照した。彼のユートピア小説論とリアリズム小説論は、芥川の政治性を論じるに非常に役に立った。

論文の内容を要約すれば、次のようになる。

まず、第1章では芥川が個人の「主観」から脱して集団的想像力に目覚めるようになった過程を説明した。先行研究では、芥川の歴史小説には葛藤と他者性が見えないと批判する。こうした特徴は、芥川のみならず、当時の白樺派や倉田百三の文章にもはっきり見えていた。特に倉田百三『出家とその弟子』には、他者を排除して何もかも自我の内面に還元する独我論がうかがえる。芥川も「青年と死と」のような作品を書いて「主観」を強調していた。

しかし、芥川がついに「主観」を相対化できたのは、口承文芸の『今昔物語』から「brutalityの美しさ」を見出したからである。当時、『今昔物語』を読む方法には二つのものがあつた。一つは、下層階級の「迷想風俗」を知る手段として『今昔物語』を読む伝統的な立場であり、もう一つは『今昔物語』に「日本の文化史料」という価値を与える芳賀矢一の観点であつた。そのような伝統とナショナリズムから距離を置いた芥川は『今昔物語』の「野性の美しさ」から集団性や他者性を見出していた。

以上のように芥川が『今昔物語』を読解した背景には、イエイツから受けた影響があつた。イエイツは、口承文芸から現代人の限界を超える太古時代の混沌を読み取っていた。こうしたイエイツの原始主義は、当時のケルト論や科学主義、個人主義に対抗する性格を持っていた。イエイツから影響を受けた芥川は、口承文芸を通して集団的な想像力を見出し、自分の「主観」を乗り越えることに成功した。イエイツの影響のもとで芥川は、個人にとっては最も理解できない、全く異質的な共同幻想を口承文芸から見出し、過去の個人主義から脱するようになったのである。

第2部では芥川「河童」の歴史性を突き止めるために、ユートピア小説というジャンルの歴史をたどった。

第2章では、堺利彦の*News from Nowhere*の翻訳によって、新たなジャンルが生まれる過程を論じた。モリスの*News from Nowhere*を翻訳した堺は社会主義のメッセージだけではなく、当時の読者に芸術的な感動を与えていた。先行研究では、堺利彦の翻訳作品の政治的な面だけを強調してきたが、本研究ではその文学的価値を問い、堺の翻訳が

ユートピア小説ジャンルの誕生に如何に貢献したかを調べた。スーヴィンとジェイムソンはユートピア小説で最も重要なのは、読者自身を批判的に顧みることにあると言った。堺の翻訳作品は、こうした定義が自然に思い浮かばせるように、翻訳されている。堺の訳文は現実と理想の境界線上に読者を立ち止まらせ、現実と理想の両方を批判的に眺めるように機能したのである。

第3章では、堺の翻訳作品が提示したユートピア小説の意義が、如何に後代において変遷されるかを調べた。佐藤春夫「美しき町」は、「高踏的な思想感情」と「特殊」を語って「疑問」を「人々」に抱かせている。その「疑問」は「多くの人々」が自分を振り返って今まで当然視した一般常識を疑うようにさせる。しかし、「高踏的な思想感情」と「特殊」を強調した佐藤春夫が「美しき町」を通して描いた世界は、非常に自己防衛的で排外的なものであった。

「美しき町」と共に第3章で論じられる「河童」は、芥川の自殺直前の心理を表出した作品として読まれてきた。しかし、本研究では横光利一の同時代評を参考にして「河童」の形式に新たな光を当てた。横光の「河童」評価である「バラバラした所に矢張りマトマリがある」と関連して「河童」が「継ぎはぎだらけ」の構造を示すことを明らかにしたのである。その構造を通して、芥川が〈超越の不可能性〉を表現したことも証明した。堺利彦と佐藤春夫と同じく、芥川も現実社会を嫌って現実の常識や原則を逆にした世界を夢みていた。しかし、芥川の問題はモリスや堺利彦、佐藤春夫と異なって、「あらゆるもの」を嫌悪しても現実から離れることができないことであつた。

芥川「河童」が指摘する社会問題は、社会エリートの想像力が貧弱であることであつた。「河童」の登場人物の大多数が「超人クラブ」のメンバーであるように、彼らは一般民衆とは異なる立場を装っている。こうして「特殊」や「高踏的な思想感情」を見せかけた階層に芥川は彼らの限界を突き合わせて新たな問題を提起したのである。

第3部では、芥川と自然主義の関係を問い直し、芥川の「理知」が如何に新たな小説構造を生み出すかを考察する。

第4章では、芥川の「理知」に関する同時代評を調べ、文学史における芥川の位相を考え直した。先行研究によれば、芥川は「技巧」と「虚構」を持って自然主義に対抗したが、結局力不足で挫折してしまい、晩年には自然主義者のように「実生活」を描くようになったという。こうした既存の定説に対し、第4章では、当時の同時代評を通して、芥川が自然主義を批判的に継承する可能性を論じた。加藤武雄は芥川の本質が「部分的」「理知」にあると言ひ、宮島新三郎は芥川の「理知」に見える「機械的」性格を指摘し、千葉亀雄は芥川の「理知」が「自然」の統一的な表象を退けて「自然」を多様な観点から暴き出すという。彼らが共通して主張することは、芥川が「全体」や「有機的な」もの、「大きな人生の問題」などを解体するということであつた。とくに、千葉亀雄は芥川の「理知」が文学者を「あらゆる観念から解放」したと言つて、芥川を「ネオ・リアリスト」と呼んでいる。こうした指摘は、芥川が自然主義を評価した「大正八年度の文

芸界」の内容とも通底しており、芥川に関する既存の見解を覆していた。

第5章では、「歯車」のプロットが持つ意味を説明した。堀辰雄の同時代評を継承した先行研究では「キリスト教的二元論」の枠組みを使って「歯車」を分析した。しかし、「キリスト教的二元論」の構造は歯車のような破片化した構造を分析するには適していなかった。広津和郎や日夏耿之介が感じたと言った〈冷たさ〉を突き止めるためには、先行研究とは異なる観点から「歯車」を分析しなければならなかった。したがって、「歯車」に登場する「病的な破壊慾」に注目し、それが権威を解体することだけではなく、「ありのままに描く」ことにつながることを明らかにした。その「病的な破壊慾」を調べることで、芥川と長谷川天溪や田山花袋との共通点も見つかり、彼等よりも芥川が徹底して「ケオスの現実界」を表現していることが確認できた。こうして新たな技法で現実を描写することで、芥川は「歯車」の構造を作ることができたのである。

以上の内容を通して本研究は芥川の歴史性が如何に小説の構造として表現されたかを論じた。